資料３

日本学術会議　大学教育の分野別質保証推進委員会

言語・文学分野の参照基準検討分科会

2012 年 1 月 30 日

川嶋太津夫

学士課程で「言語・文学」を学ぶこと

１．全ての社会的・知的活動の基盤としての「言語」

・思考の手段としての言語（認知的）

・コミュニケーションの手段としての言語（社会的）

・アイデンティティ（自己表現の手段）としての言語（価値的）

・これらは、家庭教育－初等・中等教育－高等教育（教養・共通教育）で必要な教育

※大学教育の課題（日本語教育）

２．言語の生成物（生産物）としての「文学」とそれを対象とする文学分野

・文学部（学科）は「文学」部（科）なのか「文」学部（学科）なのか

・共通・教養教育としての文学教育、「専門」としての文学教育

市民：日常的なテキスト生産（バナキュラーな文学？）　【共通・教養教育】

「実践」としての文学（読書行動）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？

【専門教育】

※「リベラル・アーツ」分野に共通する「養成すべき人材像」の曖昧さ・多様性

⇒共通・教養教育と専門教育の「境界」設定の困難さ

「文学」の生産者

？？？　（批評家）

？？？　（研究者）

「文学」の消費者

※学士課程教育における「役割」（共通・教養教育の責任？

３．分野別参照基準の意味

・学士課程における「専門分野」の位置付け

・「最低基準 Threshold」「平均 Average」なのか

・「国際的通用性」の観点（英国のＳＢＳ,Tuning Project）